

6 上顎犬歯の埋伏に伴う側切歯の歯根吸収症例について

○南 かおり，塩野 幸一，豊島 正三郎
小椋 正

鹿大・歯・小児歯

上顎永久犬歯の異所萌出による隣在歯の歯根吸収の頻度は、渡辺らによれば0.3%、Ericson らでは0.6~0.8%と報告されている。このように頻度は少ないものの発生すれば重症で、永久前歯の抜歯などの犠牲を伴わず誘導することは、一般的には困難である。上顎犬歯が側切歯さらには中切歯の歯根を吸収する場合があるが、その理由として野口らは、1)上顎犬歯の歯胚の位置が低位であるため萌出経路が長いこと 2)萌出時期が比較的遅いため萌出余地が不足しがちになること 3)歯の全長が長いこと切歯の歯根と交錯する場合があることなどが原因であろうと述べている。また広瀬らは、上顎犬歯の異所萌出が片側性にある場合、オルソパントモグラムで患側の犬歯は健側に比べてより近心に位置し傾斜も強く位置と萌出方向に異常があると述べている。Ericson らも、10歳以降で犬歯歯冠の位置が触診で左右異なる場合や、側切歯の萌出が遅くしかも傾斜している場合には犬歯の異所萌出の可能性が高く、このような症例の12.5%に隣在歯の歯根吸収が認められたと報告している。さらに10歳頃にオルソパントモグラムを撮る機会があれば、上顎犬歯の萌出状態の注意深い観察を行うように推奨しているが、今のところ上顎犬歯の異所萌出が前歯根の吸収を引き起こす可能性に関する確実な診断方法は得られていない。

演者らは、両側の上顎犬歯の異所萌出が認められ、片側は萌出誘導が可能であったが、反対側は犬歯自体の傾斜が強くなったことにより側切歯の歯根吸収が著明に認められたため側切歯の抜歯を余儀なくされた症例を経験した。今回は、本症例から上顎犬歯の萌出誘導を行った治療経過を中心に検討したので報告する。